

第53号 50円
昭和53年3月25日

内容

自然科学とキリスト教	1
交友館・国際セミナー館のこと	2
千人会	4~5
第95回大学共同セミナー	6
第96回大学共同セミナー	7
もう一つの塾	8
寄付金報告	3
寄贈図書	5
館長日記から	11
事業部だより	10
利用状況	11

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
 <所在地>
 東京都八王子 市下柚木
 (〒192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 74590番
 <東京事務所>
 東京都中央区日本橋本町3-3
 三井銀行本町支店ビル5階
 電話 東京 (241) 3961
 編集・発行人 飯田宗一郎
 製作 中央公論事業出版

近代科学は、宗教的な非合理や無知・迷信に対抗し、これから脱却し、解放されるところから生まれたという定説は、「科学」と宗教の闘争」として一般に流布されてきた。こうして、普遍的な人間理性の勝利は近代科学とともに実現し、科学を生み出した近代西欧文明は、人類のもっとも高度な文明として他の人類もこれに従い、これに倣うべきものであるという、西欧中心の「進歩」の観念を定着させた。こういう考え方は、一八世紀に次第に明確になり、一九世紀に近代西欧精神が世界的に拡大することによって普遍的な定説となるに至った。

このように西欧人は、ギリシヤ以来一直線に西欧文明が進展してきたというような単線的(モノライナー的)歴史観をもつに至った。人類は、文明以前の段階から古代帝国の時代、専制国家の時代を経てギリシヤ・ローマの奴隸制社会、さらに中世の封建社会から近代市民社会へと発展してきたというの、その大要の図式である。一九世紀前半のヘーゲルの世界歴史や、それを受け継いだマルクスの唯物史観などはその典型的なものである。

しかしながら、実際にはギリシヤ・ローマ文明(地中海域文明)と近代西欧文明(北歐・ラテン文明)とは、まったく性格が異なった文明である。人類の歴史は複数の文明圏のさまざまな生成と没落

の過程であるとして、在来の単線的(モノライナー的)歴史観に真向から反対したのはシュペンゲラーであった。彼の複線的歴史観によれば、自然科学も、もはや従来考えられてきたような普遍的なものではない。近代ヨーロッパの文明圏における学問として近代自然科学があり、その根底に固有の自然観がある。他方、シナ文明にもギリシヤ文明にも、それぞれの自然観があり、その自然観に基づいた自然科学が存在したことを考えねばならないという。シュペンゲラーは各々の文明には固有の魂が

あり、固有の人間観があることを強調し、近代ヨーロッパ文明圏の基本的な人間観をファウストの人間観と規定している。人間はその欲求を自由に發揮するべしというルネサンスの人間は、はじめはキリスト教によって批難され、ファウスト伝説に見られるごとく、地獄におちる運命にあるとされたが、

九世紀にかけてのゲーテの段階では、ファウストは天上に昇天することになる。これは、ゲーテの段階で近代の人間観が肯定されるに認められるに至ったことを意味する。シュペンゲラーは、このような

「実体」概念は学問上・思想上の中心的位置を占めるものではなくなった。そしてこれに変わって「機能・関数」(Funktion)概念があらわれてくる。例えばギリシヤおよびローマ時代における経済生活の基本観念は、実体としての土地と奴隸であったが、近代西欧のファウスト文化では、それは、経済力学としての機能的・関数的(Functional)な信用(credit)関係である。数学的にいえば、 $y=f(x)$ という関数関係である。ニュートン物理学の法則はこういう関数方程式で表現せられる。ニュートンの物理学を認識論的に基礎づけた

一方、デカルト、スピノザ、ライプニッツなど一七世紀の哲学者は二元論(デカルト)、一元論(スピノザ)、多元論(ライプニッツ)の差はあれ、ともに「実体」概念を中心に世界を構想していた。しかし、「実体」とは、まことは「諸観念の複合体」にすぎない(ロック)とするイギリス経験論の擡頭によって、一八世紀にはもはや

とせられるカントの理性批判の哲学は、人間の認識能力の「機能」(Funktion)を秩序立て明らかにしたものである。またヘーゲルの弁証法論理も「機能」「運動」の論理であり、マルクスの労働力概念も、経済社会における根本的な「機能」「はたらき」をあらわす概念である。これらの根底には対象を知ることによって対象を操作しようとする「制作の人間」(homo faberの人間)観が潜んでいる。

近代自然科学が、一七世紀に姿を現わした段階にあっては、例えば、ニュートンがピュアリタニズムの敬虔な神学者であった点にかがわれるように、創造主の睿智が刻まれている自然界の真なる理法を読みとることは、同時に神の栄光に参与するという宗教的な営みを意味していたのであった。ところが一八世紀後半の産業革命以来、ピュアリタニズムの禁欲倫理は見失われ、かくてまた自然科学もひたすら有効であり有用であることを目指す近代工学的自然科学に変貌してしまつた。かくてまた、



自然科学とキリスト教
 東京大学名誉教授
 法政大学文学部長 山崎正一

ファウストの人間を無限の活動欲求を志向する人間であるとし、このようなファウストの人間観が象徴的に近代西欧文明を表示するものと考へた。

「実体」概念は学問上・思想上の中心的位置を占めるものではなくなった。そしてこれに変わって「機能・関数」(Funktion)概念があらわれてくる。例えばギリシヤおよびローマ時代における経済生活の基本観念は、実体としての土地と奴隸であったが、近代西欧のファウスト文化では、それは、経済力学としての機能的・関数的(Functional)な信用(credit)関係である。数学的にいえば、 $y=f(x)$ という関数関係である。ニュートン物理学の法則はこういう関数方程式で表現せられる。ニュートンの物理学を認識論的に基礎づけた

一方、デカルト、スピノザ、ライプニッツなど一七世紀の哲学者は二元論(デカルト)、一元論(スピノザ)、多元論(ライプニッツ)の差はあれ、ともに「実体」概念を中心に世界を構想していた。しかし、「実体」とは、まことは「諸観念の複合体」にすぎない(ロック)とするイギリス経験論の擡頭によって、一八世紀にはもはや

とせられるカントの理性批判の哲学は、人間の認識能力の「機能」(Funktion)を秩序立て明らかにしたものである。またヘーゲルの弁証法論理も「機能」「運動」の論理であり、マルクスの労働力概念も、経済社会における根本的な「機能」「はたらき」をあらわす概念である。これらの根底には対象を知ることによって対象を操作しようとする「制作の人間」(homo faberの人間)観が潜んでいる。

近代自然科学が、一七世紀に姿を現わした段階にあっては、例えば、ニュートンがピュアリタニズムの敬虔な神学者であった点にかがわれるように、創造主の睿智が刻まれている自然界の真なる理法を読みとることは、同時に神の栄光に参与するという宗教的な営みを意味していたのであった。ところが一八世紀後半の産業革命以来、ピュアリタニズムの禁欲倫理は見失われ、かくてまた自然科学もひたすら有効であり有用であることを目指す近代工学的自然科学に変貌してしまつた。かくてまた、

ファウストの人間を無限の活動欲求を志向する人間であるとし、このようなファウストの人間観が象徴的に近代西欧文明を表示するものと考へた。

「実体」概念は学問上・思想上の中心的位置を占めるものではなくなった。そしてこれに変わって「機能・関数」(Funktion)概念があらわれてくる。例えばギリシヤおよびローマ時代における経済生活の基本観念は、実体としての土地と奴隸であったが、近代西欧のファウスト文化では、それは、経済力学としての機能的・関数的(Functional)な信用(credit)関係である。数学的にいえば、 $y=f(x)$ という関数関係である。ニュートン物理学の法則はこういう関数方程式で表現せられる。ニュートンの物理学を認識論的に基礎づけた

一方、デカルト、スピノザ、ライプニッツなど一七世紀の哲学者は二元論(デカルト)、一元論(スピノザ)、多元論(ライプニッツ)の差はあれ、ともに「実体」概念を中心に世界を構想していた。しかし、「実体」とは、まことは「諸観念の複合体」にすぎない(ロック)とするイギリス経験論の擡頭によって、一八世紀にはもはや

とせられるカントの理性批判の哲学は、人間の認識能力の「機能」(Funktion)を秩序立て明らかにしたものである。またヘーゲルの弁証法論理も「機能」「運動」の論理であり、マルクスの労働力概念も、経済社会における根本的な「機能」「はたらき」をあらわす概念である。これらの根底には対象を知ることによって対象を操作しようとする「制作の人間」(homo faberの人間)観が潜んでいる。

近代自然科学が、一七世紀に姿を現わした段階にあっては、例えば、ニュートンがピュアリタニズムの敬虔な神学者であった点にかがわれるように、創造主の睿智が刻まれている自然界の真なる理法を読みとることは、同時に神の栄光に参与するという宗教的な営みを意味していたのであった。ところが一八世紀後半の産業革命以来、ピュアリタニズムの禁欲倫理は見失われ、かくてまた自然科学もひたすら有効であり有用であることを目指す近代工学的自然科学に変貌してしまつた。かくてまた、

創立の目的と使命を貫くために 温かで親しみやすい施設が生まれる

◆利用者をもてなす憩いの場

交友館(別称キリンサロン)とは

Facility Service, Hospitality, Etiquette

セミナー・ハウスは現代に生き

ている。創立以来大学および大学人の要望に応じて、次々に施設が加わり、整備されてきたが、なお欠けたものが一つあった。「私はセミナー・ハウスが好きですよ」といわれる人々も、「しかし、セミナーが終わった後で、気楽にのめるところがあると、さらによいがね」という陰の声があった。セミナーの学生も教授を囲んでのむならば、親近感を深めるであろう。学会の後では、のみながら話はずむであろう。セミナー室や講堂では、見せない人間性をさらけ出すのもこのときである。一期一会、人と人とはこのような雰囲気のもとで出会うことができる。出会いが継続して友となる。ただし銀座や新宿で見かけるような喫茶店でも、コピーショップでもなく、いわんやバーとか、のれんをくぐる飲み屋ではない。それはセミナー・ハウスのサロンである。そこには作法があり、品位があり、なごみがあり、何よりのしきがある。「不心得者は入るを許さず」

というのが不文律である。

「文学とは、二度読まれるようなものを書く技能である」といわれるが、「ホスピタリティとは、二度飲みきたくなるような雰囲気をつくるもてなしの技能である」といふべきか。

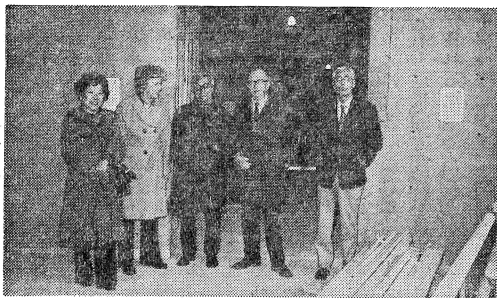
キリンサロンから眺める夕焼けどきの大きな西空は壮観である。サロンの大きなガラス窓を通して

◆学生・研究者が交流の輪を世界に広げる場

国際セミナー館とは

International Residential Service, Cultural Interface

セミナー・ハウスには永遠性がある。いつの時代でも、現代に生きながら先駆者的なプログラムを開拓しなければならぬ。国際セミナー館は今日の状況の中で企画された明日を目指す建物である。国際環境は変化するからである。国際的な集会には三つの型がある。第一は在来型の国家中心の組織代表の会議である。第二は国際学会で、専門家が集まる大規模な研究会である。第三は、この



丸山真男夫妻とオックスフォード大極東部長R. ストリー夫妻(国際セミナー館正面玄関, 2月21日)

(前ページよりつづく)
ことを根本前提とするものである。この根本前提は間違った根本前提である。

近代の自然科学は真理の追求という点で神の真理にも匹敵するような、客観的真理に迫ろうとする人間の壮大な試みとして、現在のところある程度まで成功したものだと思ふ。これは今後の人類の貴重な遺産となるものであって、人類はこれを相続・発展させていくべきものであろう。しかし、人間世界はもともと真善美が一体となって初めて成り立つものである。近代西欧の自然科学も真理という認識価値実現のひとつの営みである。しかし、人間が生きていくうえで真理だけが必要なものではない。真を重んずるあまり善や美を捨て去ってよいというわけのものではない。ところが

でも得られるが、それ以上に食事をしたり、散歩したり、深夜まで飲みながらおしゃべりすることの中で得られることが多い。

国際セミナー館のたつ多摩の丘は豊かな自然があり、自由を熱愛する人間と真理を探索する学問が存在している。第三の型の国際的な集会には最良の条件を備えている施設である。恐らく現在では、日本で唯一の場所であろう。

大学セミナー・ハウスは国公立の大学の壁をこえる教育活動の一つの紀元をつくったが、いま十

今日の文明社会は、善美なる価値をエモーションナルなもの、主観的なものとして切り捨てる基本傾向のものである。

力はむしろコントロールさるべきものである。力の無制限な讚美に反対して、真善美を調和的に実現するという課題が現代の人類の課題である。自然科学がいまよりも、はるかに善美なる学問にならなければ、人類にとって二一世紀は拓けないであろう。社会革命・社会改革にあたって、われわれは、公正(正義)の原則だけによる社会ではなく、やさしさや美しさ(パブリックな)価値とせられる人類社会を求めなければならない。こういう社会を建設するべく、努力するのなければならぬであろう。

(第94回大学共同セミナーの全体講義より。文責・編集者)

周年を起点として、これからは国家間の壁をこえるための国際交流に新生面を拓くのである。

当面は在日留学生を招き、国際学生セミナーを開催し、各国の政治・経済・社会・文化についての知識を学び、共同の生活体験を通じて人間的交わりを深めること、さらに留学生に対する日本文化の紹介を行うなど、将来の国際社会の一端をになつていく日本の学生や外国の学生に対し、国際理解の「場」と「機会」を提供していくであろう。

◆「招待」

◇落成を祝う集い

【交友館】 5月27日(土)
式典11時/祝宴12時30分
記念講演14時

京都市大学教授 広中平祐氏

落成記念大学共同セミナー
主題||日常生活||そのルーツ
と展望

【国際セミナー館】 6月24日(土)
式典11時/祝宴12時30分
公開講演14時

落成記念国際学生セミナー
主題||文化接触と日本

◇サービスの予行練習

【交友館】

何しろ初めての試みです。「生活は簡素に」をモットーとしているセミナー・ハウスのことです。職員がもてなすサロンです。利用者の協力をたよりにして開店するサロンです。開店する前の5月1日から27日までの間にサービスの予行練習をします。よく来られるゼミの先生方、千人会の方々をお招きして、サービスの練習をしたいと思います。無料でのんでいただきますから、友を誘い、家族を伴って、半日の清遊を試みて下さい。

【国際セミナー館】

何しろ、理念とモットーを現実

に生かすことを考えた建物ですから、使い方には工夫を要します。ご経験の深い方々のご忠言を必要

とします。開館する前の6月1日から24日までの間にサービスの予行練習をしたいのです。国際的な会議や学会に出席されたり、世話

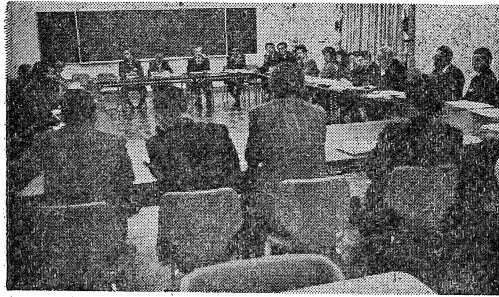
◆お願い

◇装飾品・調度品のご寄贈

交友館サロンには、ワゴン、コーヒーヒール、紅茶のポットやカップ、スプーンなど必要最少限のものは整えますが、恐らく不十分でしょう。雰囲気をつくる軸や額も必要です。

前庭には、パーベキューのコーナーもできますが、屋外用の陶器の椅子やテーブルも必要になるでしょう。

国際セミナー館にはセミナー室



加藤一郎東大教授の「中国の教育事情」を聞く(留学生問題研究会, 1月15日)

をしておられる教授達や言論人・財界人・官界人をお招きして、一泊していただきます。宿泊料は無料ですが、ご忠告とご意見とご協力をお持ち下さるよう願います。

が四室、宿泊室が一三室あり、そのほかに談話室や学生会務室がある。二階三階の廊下は室内歩道である。この館の中は日本の中の世界なのだから各国の習慣・風景を表わすような絵画や民族品が飾られているとよい。前庭のたまり場は、風景絶佳。そこには置きものがよい。時を忘れてしゃべるような場である。浴室がある。洗濯場がある。展望のバルコニーがある。ないものが沢山ある。それを無理して急ぐこともなく、協力を仰ぎながら整備したいのです。

予行練習期間中にお泊り下さって、お手許にある余分な物品を供出して下さると有難いです。

寄付金報告

53年1月末現在

◆開館十周年記念事業寄付金

第六報(52年12月/53年1月)
10,000円
普通土学園事務長 原順一郎殿
10,000円
中央大学教授 熊田陽一郎殿
3,000円

第95回大学共同セミナー指導教授
三、五〇〇円

明治大学教授 中村雄二郎殿
中央大学助教授 生松敬三殿
東京大学助教授 坂部 恵殿
東洋大学助教授 新田義弘殿
東京都立大助教授 足立和浩殿
東京経済大学助教授 荒川幾男殿
10,000円
東京大学助教授 平野健一郎殿
10,000円
工学院大助教授 須田精二郎殿
10,000円
ユネスコ・アジア文化センター
図書開発部課長 浅野明美殿
9,000円
日本学術振興会人事交流課長 阿部美哉殿
5,000円
東京神学大学助教授 大木英夫殿
3,000円

第96回大学共同セミナー指導教授
東京大学助教授 大内 力殿
横浜市立大学助教授 佐藤経明殿
同 助教授 矢吹 晋殿
法政大学助教授 齋藤 稔殿
東洋大学助教授 新田俊三殿
東京大学助教授 馬場宏二殿
10,000円
武蔵工業大学長 山田良之助殿
1,000円
◆一般寄付金
1,000円
中央大学教授 熊田陽一郎殿
2,500円
東京理科大学理工学部物理学科
大沢研究室大沢ゼミ殿
三、六〇〇円
成蹊大学法学部宇野ゼミ殿
二、六〇〇円
中央大学理工学部近藤ゼミ殿
10,000円
故今村護郎先生夫人今村令子殿
3,000円
東京経済大学事務研究会
10,000円
中島義博殿
三、五〇〇円

東京外国語大教授 斎藤恵彦殿
◆植樹寄付
五、三〇〇円
東邦大学理学部生理科学
セミナー参加学生一同殿
◆指定寄付金
(国際セミナー館内部装飾費)
五、〇〇〇円
第5回国際学生セミナー指導教授
運営委員一同
上智大学客員教授
グレゴリー・クラック殿
国連大副学長 武者小路公秀殿
慶応義塾大学助教授 鈴木孝夫殿
東京経済大学助教授 内田星美殿
評論家 金山宣夫殿
成蹊大学助教授 広野良吉殿
早稲田大学助教授 示村悦二郎殿
東京大学助教授 平野健一郎殿
早稲田大外事課長 山代昌希殿
日本学術振興会人事交流課長 阿部美哉殿
二、一〇〇円
第5回国際学生セミナー
参加者一同殿
(追悼会の生花代)
3,000円
東邦大学教授 吉田光孝殿
2,500円
第97回大学共同セミナー、オプザ
ーパー参加者 斎藤忠蔵殿
◆館長喜寿祝準備基金
三、三〇〇円
第95回大学共同セミナー
参加学生一同殿
元、〇〇〇円
第97回大学共同セミナー指導教授
聖心女子大学助教授 岡 宏子殿
東京大学助教授 後藤英一殿
同 野田春彦殿
京都大学助教授 平野俊二殿

千人会

昭和52年10月〜53年1月現在

現在会員は、一、五〇一名です
大学人 一、一五九名
社会人 三、三四二名

入会のごころ

八王子の地元のことでもあり、何かとよろしく願っています。
創価大学教授 関 順也
第5回国際学生セミナーに参加したのを機会に入会させて頂きました。
中東経済研究所 住田友文

今年の11月に材料工学研究室の卒研生のゼミに長期研修館を利用して頂きました。
東京都立大学助教 宮野三郎

飯田先生のご努力がやっとつきました。今度も必分の contribution をしたく思っています。
東京大学助教 寿岳 潤

第96回共同セミナーに講師として参加し、セミナー・ハウスの存在意義を再確認致しました。
横浜市立大学教授 佐藤経明

昨年、青山学院理工学部の研修会に参加いたしました。
青山学院宗教センター 上田初子

新しく会員となられた方々
27名(第41回報告(申込順))
終身 農業 飯田一郎殿
A 関ゴンファン・クボ社長
久保三男殿

A 専修大学長 高橋長太郎殿
C 英国ダーハム大学物理学科 島田徳三殿

C 国民生活センター
上原 章殿
吉利 和殿

A 浜松医科大学長 関 順也殿
A 創価大学教授 百瀬 宏殿

C 津田塾大学教授 田田友文殿
C 中東経済研究所 今井裕之殿

C 日本物産(株) 川崎正三殿
C ワールド・エンジニアリング コンサルタンツ建築設計部

C 富士通IC事業部 パイポラ プロセス課 藤田一朗殿
B 東京都立大学助教 宮野三郎殿

C 東京大学講師 遠藤健治郎殿
C 東京大助教 寿岳 潤殿

終身 お茶の水女子大学助教 大口勇次郎殿
C B 上智大学教授 小林宏晨殿

C 東京都立大学助教 速水佑次郎殿
C 東洋大学助教 堀 光男殿

C 横浜市立大学助教 矢吹 晋殿
C 東京大学助手 麓 信義殿

C 横浜市立大教授 佐藤経明殿
C 青山学院大学宗教センター 上田初子殿

A 東京ゴム商事(株)代表取締役 小俣武夫殿
終身 宇宙開発委員会委員 吉識雅夫殿

B 早稲田大学教授 村田勝彦殿
◇会費ありがとうございます
52年10〜53年1月(敬称略)

飯田一郎、加藤一郎、相良惟一、沖中重雄、佐原六郎、天利長三、井関利明、戸田盛和、松田稔子、板垣與

一、久保三男、坂野親司、森泰三、源了圓、今井淳、井上勝也、伏見弘、藤木宏幸、岩崎力、見田宗介、松田千鶴子、加藤五六、野田良之、外間寛、高橋泰蔵、久場輝新、田村誠正敏、田端正、新田悟、杉澤新一、川鍋正敏、田端光美、横田洋三、小田中敏男、小田滋、小野沢精一、藤村瞬一、川村亮、鶴岡義一、平野敬一、石川静一、鳥居泰彦、矢内喜久子、宮下啓三、柴田愛子、白井平、森岡清美、鈴木順子、布川角左エ門、大貫一、高橋彰、大竹誠、西川潤、神田信夫、末松安晴、関口利男、小河原正巳、満尾寿男、黒田まゆみ、原豊、泰本融、小倉安之、伊藤秀夫、松岡八郎、平野健一郎、松延博、斎藤信房、赤塚四郎、山口喬、秋田成就、米満澄、清水英夫、大坪秀二、鈴木満、戸塚元吉、正路徹也、寺東寛治、岩浅武雄、朝日信夫、石村善助、井門富二夫、貝塚爽平、福田隆義、伊藤成彦、宇都木章、飯吉厚夫、日高輝二、森井眞、鈴木喬、江尻美穂子、永澤隆一、村瀬和雄、佐々木克己、山口清隆、中岡和子、安達健、助盛晴、重田信一、藤永保、小川芳男、堀信一、磯辺浩一、久武雅夫、鶴山貞登、宮野彬、東條秀光、坂本清、北沢一雄、鶴見和子、土山牧生、高野雄一、宮崎繁樹、清水護、岡本昌秀、福島正久、石川吉右衛門、神山妙子、佐藤方哉、武者小路公秀、山科高康、前田陽一、石川正一、岡本定次、宮崎厚一、上原章、高木仁、齊川仁、宇野重昭、佐藤共子、祖父江孝男、八木三男、吉沢英子、吉永フミ、弓削三男、平沢興、長清子、田中外次、玉虫文一、外池正治、伊藤玄三、出居茂、宇野義方、深沢宏、飯田芳男、木下是雄、山本大二郎、朽津耕三、飯島宗享、末永国明、小林徹郎、中井虎一、森田信義、牧内操、内田章五、山本登、小川捷之、宮部菊男、三輪光雄、笹

島恒輔、宇都栄子、石橋秀雄、外池孝雄、水野伝一、勝木保次、江上不二夫、小松八郎、阪田正三、坂口順治、山本澄子、田原虎次、相馬勝夫、田恒代、村井賢長、高橋三郎、太田時男、飯田八千代、馬場明男、湯本孝、高橋七五三、大須賀節雄、堀木隆一、金田品二、金山宣夫、増谷和子、衛藤藩吉、飯野利夫、山崎典、飯田栄、竹内与子之助、安藤瑞夫、松元文子、森繁雄、薄衣佐吉、細田友雄、江副敏生、松本権太、青木生子、山岸健、渡辺仁、田村光三、谷重雄、関龍夫、田中昭二、近藤保、島田徳三、鈴木基之、内藤正、新井益太郎、増田義男、石川明、増淵恒吉、奥繁光、中尾由矩子、安味真正、井上達雄、茂木誠陸、一ノ瀬智司、岡本敏雄、大地羊三、角尾稔、半谷高久、岡惺治、大谷禎之介、大須賀政夫、飯田忠、友部直、西巻正郎、市川勝洋、田中弥寿雄、関順也、吉川昌範、齊藤忠利、藤村宏一、絆川蒸、杉山茂、吉瀬宏、池田貞雄、山田暁、池川郁子、岡崎正、江幡玲子、木村敏美、沢孝一郎、池田温、三戸公、和田木松太郎、山下幸夫、来住正三、手塚富雄、西田亀久夫、伊藤文人、茅伊登子、清水誠、横沼健雄、小穴純、示村悦二郎、住田友文、築地整、三井為友、吉武泰水、石田孝夫、関口実高橋浩爾、笠井貴征、沼田滋夫、大川信明、有山正孝、田北敏行、三浦安子、佐島裕夫、平原美枝子、平幸一、岩尾裕純、福原満洲雄、岩崎代志治、飯田能子、笠原正成、須田精二郎、竹村研一、竹中肇、天野成光、三辺正雄、佐々木邦彦、青木俊一、慶伊富長、藤田一朗、川崎正三、今井裕之、太田淳一、吉田光孝、寿岳潤、濱川祥枝、湯浅光朝、太田敬三、石井不二雄、田村院司、杉山好大塩俊介、桑原哲郎、伊藤修、瀬川

渡、中鉢正美、伊東好次郎、佐藤豪、加藤信朗、高山利勝、川端香男里、山鹿誠次、中尾信之、平木典子、塚本利明、伊藤洋、上田明子、三浦永光、大友昌子、稲垣重夫、森田豊夫、石本茂雄、升本喜兵衛、宮川松男、川井明、赤松秀雄、本谷勲、江藤淳大羽滋、鈴木皇、後藤聰一、古田勝久、山田圭一、竹内啓一、石川孝夫、武藤義夫、佐々木彰、武藤昌輔、小菅敏夫、清水啓三郎、齋藤昌二、深沢実、山本啓、池田公鷹、渡辺忠胤、青柳総太郎、矢野正、野中虎雄、上山碩、岩下秀男、若山邦敏、古賀正則、大川章哉、福島杉夫、関正彦、澤本孝久、米川哲夫、矢澤修次郎、岩永達郎、速水佑次郎、久保田端郎、福本日陽、小山弘志、増田武男、佐久間純郎、新井明、園田義道、本田和子、喜多村和之、若林真雄、高橋源次、刈田元司、飯田宗一郎、高橋恒郎、打田峻一、乾崇夫、飯泉信、小林清子、中富光國、堀光男、萩原玉味、伊藤学、根岸愛子、小俣喜久治、矢吹晋、松元三郎、茅野良男、前島郁雄、慶谷壽信、大内英吾、師岡孝次、谷口修、白井泰四郎、中島邦男、萩野巖、守永誠治、柳澤富雄、池井優、石田龍次郎、増地昭男、篠崎武、河田敬義、別枝達夫、田上穰治、高橋昭三、川瀬謙一郎、北原文雄、小川洋輔、浦上要三、猪瀬博、石塚司農夫、村上泰治、田中英夫、川喜田愛郎、中利太郎、加倉井茂樹、木村康雄、松原元一、清水長三、原川孝正、谷塚之、有賀清水、三原孝正、中山知雄、小俣武夫、磯村英一、藤巻正生、武村次郎、玉野井芳郎、内山正熊、大即英夫、村井孝子、森山俊雄、村上真、吉川春寿、光延明洋、鈴木博、村田勝彦、原正彦、矢田俊文、天野都夫、関口晃、大橋万知江

◇千人会員からの便り

今度、B会員の方へ昇格させて頂きますので、どうぞよろしく。

ICU準教授 横田洋三

誕生カードありがとうございました。一年の速さを痛感し、一日一日をしっかりと、と肝に銘じます。昨6日、日曜のTVブラウン

閑話で永井先生がセミナー・ハウスのことを取り上げられました。多くの目がむくことを祈っております。成蹊大学教授 飯田芳男

本年3月末で停年に達しました。毎年春にはゼミの学生を連れてお邪魔していましたが、永いこと大変お世話様になりました。益々ご発展を祈っております。明治大学講師 内田章五

8月3日機構長の発令があり、東京医科歯科大学長を辞職し、直ちに愛知県岡崎市に参り新しい研究機関の開発に努力しております。生物科学総研究機構長 勝木保次

一昨年日大を退職いたし、只今明星大学に行っております。幸い現在丈夫で働いており、本年も会費を送ることができ有難いと思っております。セミナー・ハウスの発展を祈つてやみません。明星大学教授 馬場明男

小生80歳を迎えました。お蔭で元氣飯田先生の健康を祈ります。武蔵工業大学名誉教授 岡本定次

昨年からA会員にして頂いております。本年3月末に女子栄養大

学を定年退職いたしました。

松元文子

今年には本当年に忙しい年でした。成果は来年現われる予定です。来年はじっくり腰をおちつけて研究に励むつもりです。成果の前祝いと来年の充実を期してチョッピリ増額します。東京学芸大学助教 杉山吉茂

私の古稀に対しご丁寧なお祝辞をいただきましたことには難うございました。上智大学教授 小穴 純

仕事に追われ、子供達に追い回され、ごぶさたしております。上の子は春には小学校です。日本経済新聞社勤務 奥 繁光

いつもニュースありがとうございます。遠く離れておりますが、ニュースで結ばれております。主婦(山形在住) 平山美枝子

秋には久しぶりにお訪ねし、家のチビ組大いに気に入った様子です。また機会をえてお邪魔したく存じます。東京大学助教 杉山 好

私もいよいよ人並に古稀を迎えました。茅先生の大学セミナー・ハウスと小さな親切運動は私の財力がつくづく限りお送りしたいと思っております。中央協同組合学園嘱託 野中虎雄

年末に病に罹りましたが、無事65回目の誕生日を迎えられそうです。早稲田大学教授 川本茂雄

お蔭様で67回目の誕生日を迎えました。なお現役で働いております。

国立分子科学研究所長 赤松秀雄

大学セミナー・ハウスの優れたお仕事にいささかなりと協力できることを喜んでおります。お込んだお知らせを待っております。今年もしばしばセミナーで使わせて下さい。青山学院大学教授 守永誠治

冬麗や多摩の山なみ高からず 淑徳大学教授 福本日陽

来春は私共の娘も大学生となることになりました。セミナー・ハウスの丘で学ぶ機会をとねがっております。津田塾大学教授 上田明子

ご発展の様子をうれしく思っております。今年は満81歳になりましたが、元氣ですからご安心下さい。日本常民文化研究所理事長 有賀喜左エ門

お蔭様で今年も元氣で76回目の誕生日を迎えることができました。ありがたいことと感謝しております。春の陽ざしの濃い頃、またお邪魔させていただきハウスのご盛況を拝見したいと願っております。弁護士 原 増司

本年はゼミも持たず一度もお邪魔できず残念でした。一月一日に45歳、まさに花の中年、胴まわりも気にならなくなる程の拡大です。感謝しつつ。警視庁青少年相談所 江幡礼子

寄贈図書

52年7~11月

「世界の歴史第2巻 秀村欣二殿 採集と飼育」7~11月号 日本科学協会

「On death and dying」メアリー・グリーン殿

「婦人公論」8月号、「小説新潮」9月号、「文芸春秋」8月号、「人と日本」9月号 笠原正成殿

「政治経済史学」二一九~二三五 日本政治経済史学会殿

「現代への祈り」三浦安子殿

「重くおびきの下で」ブラジル農民解放闘争一 西川大二郎殿

「大学院テニス・シリーズ」VII 「微分幾何」「波動論」「弾性構造物の安定理論」「熱流体の数学」 Principles of Hydro-Elasticity 鬼頭史城殿

「私立短期大学白書」尾形 憲殿

「早稲田フォーラム」早稲田大学広報課殿

「古典のいずみ」日本の古典文学」青木生子殿

「古層の村」「微気象の探究」一考古学の基礎知識」伊藤隆吉殿

「佐渡叢書」第10巻 松井源吾殿

「批評の生理」エッセ・スタンダード石油殿

「国際社会における人権」高野雄一殿

「土佐日記 蜻蛉日記」木村正中殿

「教育一語」全人教育論」師道」玉川教育一九七三年版」玉川大学文学部教育学科殿

「労働法実務大系」12 秋田成就殿

「紀要」第3巻 多摩芸術学園殿

「地理と教育」山鹿誠次殿

「日本人とおもしろいです」やっぴり日本人とおもしろいです」澄江堂句鈔」国際教育振興会殿

「社会主義経済論序説」斎藤 稔殿

「アジアの昔話」第三巻、「Folk Tales from Asia」vol.「Asian Culture」17 金融経済研究所殿

「大学時報」一三四・一三五 日本私立大学連盟殿

「韓国キリスト者の人権運動」「カーター政権のアジア政策と朝鮮半島」朝鮮問題」懇話会殿

「The Future System of Higher Education」大学論集」第5集、

「大学研究ノート」27~30 広島大学大学教育研究センター殿

「東京大学」近代知性の病像」折原 浩殿

「植物と文明」福田一郎殿

「追憶の橋田邦彦」勝木保次殿

「立体・イギリス文学」ワイルド喜劇全集」荒井良雄殿

「私の軍政記」国連の窓から」斎藤鎮男殿

「社会科学における人間」大塚久雄殿

「妖精の世界」井村君江殿

「青年期の心理と学生相談の展開」林 潔殿

「履歴80年」森戸辰男殿

「公と私」三戸 公殿

「世界の思想家」第5巻 飯島宗享殿

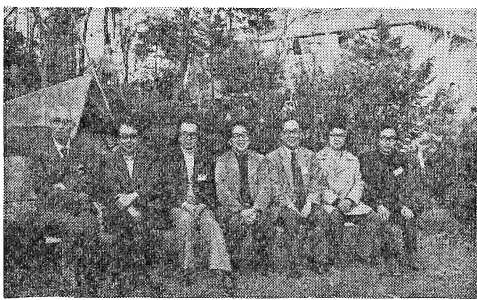
「日本は新しい志をつくるな」転換する米アジア政策と日本」宇都宮徳馬殿

第95回 大学共同セミナー

主題——理性と想像力

——現代哲学の基本課題——

期日——昭和52年12月2、4日



右より坂部、足立、荒川、生松、森本、新田、畷田の諸氏

△全体講義▽
 理性と想像力——ことばの相のもとに
 明治大学教授 中村雄二郎氏
 △ゲスト講演▽
 文明のルーツ——旅行者の思索
 評論家 森本哲郎氏
 △セクシオン 演習▽

A 思想史の中の「理性と想像力」
 —一九二〇年代ドイツを中心に
 中央大学教授 生松敏三氏
 B 現代哲学と日本語の接点
 東京大学助教授 坂部 恵氏
 C 想像力の現象学的考察
 東京大学助教授 新田義弘氏
 D 理性への挑戦——ジャック・デリダと現代哲学の諸問題
 東京都立大助教授 足立和浩氏
 E 構想力と現実——近代日本と三

木清の場合
 東京経済大学教授 荒川幾男氏
 (運営委員)

△参加学生▽103名(内女子41名)
 筑波大(12)、東大、ICU、法政大、早大(各7)、慶大(6)、東外大、中大、東洋大(各5)、お茶の水女大、成城大、東女大(各3)、東工大、東農工大、一橋大、独協大、青学大、上智大、大正大、津田塾大、明大(各2)、東学芸大、横浜国大、静岡大、都立大、都留文大、学習院大、芝工大、成蹊大、玉川大、東経大、日大、日大、明学大、立命館大、大妻女短大(各1) 合計36校

今回のセミナーは、次のような主旨の下で想像力の復権によって伝統的理性主義を克服しようとする、現代哲学の先鋭なテーマのもとに開催された久方ぶりの哲学セミナーである。

「現代は、多様な価値観が相対する大きな転換の時代である。そのなかで、私たちは『生きる』ことと『考える』ことの分裂に悩み、『生きる』ことの意味を容易に把握できないでいる。このことは、これまでの『ものの考え方』、『感じ方』が現実に対応する能力を失い、これまでの世界と人生を理解する前提的観念体系が破綻したととだといえよう。近代合理主義原理に基づいて、政治や経済あるいは科学技術などの発展進歩を追求

してきた私たちは、その結果としての閉塞的な社会や公害に悩み、近代的自我の追求を果てに、自らのアイデンティティを失うにいたっているのである。(中略)

このような状況のなかで、再び私たちの足場を固めるためには、私たちの内面の伝統となつてきた近代理性の諸相をきびしく問いなおし、想像力の復権の意味を再吟味して、新たな理性的立場を探らなければならぬ。

運営委員の荒川東経大教授の企画力によって、現代哲学の第一人者および優れた若手研究者を講師陣にお迎えすることができた。

哲学的テーマへの関心は高い。実に三六大学から一〇三名の参加者を含め、理工系・医学系も含めて四分の三は哲学科以外の学生であった。専攻の如何にかかわらず幅広い議論の場を提供しているのは、大学共同セミナーならではのことである。

中村雄二郎氏は全体講義において、近著『感性の覚醒』によりながら現代の疎外状況を産み出した「理性」の批判に言及し、感性や情念の正当な復権を呼びおこすには、想像力の座としての「共通感覚」、および思考と感覚の結び目としての言語活動の解明に待たねばならないとし、最近の言語論PIMの背景にも触れた。さらに氏が自ら撮影し録音したパリ五月革命のスライドと実況によって、批判的想像力のあらわれを具体的に示し、人間は無限に人間を超えているというパスカルの言葉に、想像力の無限の働きを託しつつ講演を結んだ。

二日目は、世界の文明を訪ね歩いて独自の評論活動を繰り広げておられる森本哲郎氏をゲストに

迎えた。「文明のルーツは宗教にあり」とする氏の文明論は、五千年の文明史を「多の文明」(ギリシャ、オリエントの多神教)、「一の文明」(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)、「二の文明」(中国)、「ゼロの文明」(インド)の四つの文明の興亡史としてとらえ、それぞれについてダイナミックな解説を加えた。最後に、文化的混淆としての日本に触れ、本来は八百万の神といわれるように「多の文明」であったが、大陸文化の摂取とともに「一の文明」(儒教)と「ゼロの文明」(仏教)が入ってくる。そして維新後、近代科学という「一の文明」の洗礼を受け今日に至るが、日本史のドラマは男性的な二の文明と極めて女性的なゼロの文明のいわば夫婦喧嘩の所産といえるだろうと締めくくった。豊かな実例と巧みな術術に導かれた講演の随所に、期せずして生きた奔放な想像力をみることができた。

講演後の自由時間は演習を続行したグループもあるが、落陽かけた

●通訳の役割を果たした三日間

東京大学助教授 坂部 恵

一般にセミナーというものはそのようなものだとなつたは了解しているが、とりわけこのセミナー・ハウスにおけるような場合は、主体はあくまで参加者たる学生諸君である。教官の役割は、単なる助言者のそれであり、それぞれに専門を異にし、多様な関心をもつた学生諸君があるテーマをめぐるお互いの意見を交換し合うにあたって、さしあたりたつき台となる材料を提供し、また、難解な専門用語をできるかぎり日常の平易な表現に置きかえて、討論がスムーズに運ばれるべく、通訳をつとめることにあるはずだ。役割がすめば、老兵はさり気なく消えるのが理想的形態というものだろう。

「理性と想像力——現代哲学の基本課題——」と題された三日間にわたる大学共同セミナーの最終日の全体集会の席で、学生諸君のまったく自主的な運営によって、見事に全体の総括がなされ、また

る講堂では中村氏が持参して下さった故森有正氏演奏のバッハ・コッラル前奏曲のレコードに耳を傾け、静謐ななかでの思索のひとつを過ごした。

学生の自由討議による最終日の全体集会ではフッサール現象学、言語論や身体性問題、なかんずくロゴス中心主義の形而上学の破砕を試みている気鋭的・デリダの所論に議論が集中したようだ。

荒川氏は開講に際し「哲学を抽象的に捉えるのではなく、自分で問題を発見し、問いを建て、それに応えるべく考えろ」という訓練をしていただきたい」と要望したが、学生の一人が「自分で考えることの難しさと大切さが骨身にしみて感じられた」ともらしていたように、三日間の思考と出会いの体験は、学生たちの今後の勉強と生活に「考えること」への励しを与えたことだろう。

なお、生松敏三氏が主題と同じタイトルの小論「理性と想像力」を「世界」三月号の論壇に書かれ、このセミナーに触れている。

活発な充実した討論がかわされ、ことに深い感銘を受けたあとで、教官一人一人がもういわずもがなのコメントを求められたとき、わたしは右のような趣旨のことを述べた。

哲学のセミナーといえ、専攻の如何を問わず人間として今日の時代に生きるだれしもが切実に関心をもたざるを得ないテーマが取り上げられる関係上、一般性に富み、共同セミナーのテーマとしてうってつけといえる反面、とりわけ現代哲学の用語や手法の難解さ、ましてや明治以降の日本語の翻訳哲学术語のほとんど奇型的といつてよいこと、なれの悪さが大きな障害となつて、チンプンカンプンのやりとりで終始してしまふ危険もまた大きい。

しかし、幸いこの点今回のセミナーでは恋愛に終つたことを、何よりも先に触れた全体集会のいきいきとした雰囲気如実に示していた。セクション演習で助言者

をつとめた教官一同、難解な専門用語のやりとりではぐらかすという退路を断たれ、否応なく学生諸君ともども現代に人間として生きることそのものはむさびさまな局面でのむさびさまにむかひに向い合うことを強いられて、若いひとびとのとらわれのない発想から多くを学び、また今日日本の学問と教育のあり方について深く反省する機会を与えられて、常に高く高揚した三日間を過ごすことができた。

中村雄二郎氏の全体講義がバリの五月革命のスライドを併用して効果を高めたり、森有正氏のオルガン演奏のレコードを二日目の自由時間に静かに鑑賞したり、森本哲郎氏のゲスト講演が、難解な哲学术語を一切使わずに哲学の本質にかかわる問題を考えうることを身をもつて示したり、これらのことも今回のセミナーの成功にあずかって大きな力になつていたように思われる。

予 告

▼交友館落成記念

第98回大学共同セミナー

主題 日常生活—そのルーツと展望—

期日 昭和53年5月26〜28日

△全体講義 宮本常一氏

△ゲスト講演 廣中平祐氏

△セクション演習

京都大学 廣中平祐氏

慶応義塾大学 芳賀 徹氏

慶応義塾大学 山岸 健氏

東京工業大学 原 芳男氏

慶応義塾大学 中鉢正美氏

立教大学 香原志勢氏

△運営委員

東京工業大助教授 谷口汎邦氏

国際基督教大教授 勝見允行氏

▼第99回大学共同セミナー

主題 芸術のたのしみ—芸術創造における多様性—(仮題)

期日 昭和53年7月14〜16日

△運営委員

共立女子大学教授 友部 直氏

▼国際セミナー館落成記念

第6回国際学生セミナー

主題 文化接触と日本

期日 昭和53年6月23〜25日

●武蔵国へ下りし男の独語

(セクション) 田 辺 昭 夫

まだ昂奮している。今回のセミナーのことだ。古代ギリシャのあのプラトンのアカデメイアの昔に立ち戻つた錯覚に、未だ快い疲れを覚えている。昂奮は、勿論僕の思索する「場」を確保したことに起因するのだが、もうひとつの「場」の発見にも基づいている。

ほんの少し顧みればわかることなのだが、そしてまた、一般に轟かれて久しいことだが、大学の大衆化(これは喜ばしいはずなのだ)と、それを引き起こした高学歴偏重の社会風潮、その結果生じた大学の性質の変化と学生の知識欲の低下等々、これらの事柄は巷の現実主義、実証主義の風潮と結び付いて学問の危機、学問の場としての大学の危機を露呈させている。

なるほど、すべての学の追求めてやまない理念は、いずれは自らの理念のうちに現実を包括しなければならぬし、常に現実を直視することよつてのみ理念はその姿を現出させるのだ。しかし早まつてはならない。安易な、理念と現実との雑居あるいは並置の場からは何もかも生まれない。ところが、先に述べた理由から、今や大学の危機がそのような事実を内包して現前化している。とすれば、このすでに与えられた大学の危機から、この現実に基づいて脱出していこうとするために

はどうすればよいのだろうか。

このような問に対して、「大学セミナー・ハウス」の在り方はその解決の道を示唆しているように思える。例えば、ここで催されるセミナーへの参加のために、何よりもまず知への情動が前提されている。それはやがてインテリゲンチヤとしての自覚を促すだろう。さらに学者と学生との共同生活とそれに伴う多くの対話は、各々の学への足掛かりを提供し、あるいはその現実化への動機づけとなるであろう。あるいは、セミナー・ハ

ウスの恵まれた自然環境は、知識だけで熱くなった頭の覚醒を促すかもしれない。

このような「場」こそ、様々な危機に直面した僕達に必要なのではあるまいか? さらに、このような「場」をもつてこそ、本来の大学たり得るのではなからうか? などと、醒めやらぬ昂奮に任せて、思わぬ大風呂敷を広げてしまった。しかし広げた以上は、今後少しづつ、それに似合うものを取りたい。

(立命館大学4年)

第96回大学共同セミナー

主題—現代の社会主義

期日—昭和53年1月13〜15日

△全体講義

現代社会主義の考え方

東京大学 大内 力氏

△講演とセクション演習

A 現代社会主義の考え方

大内 力氏

B ソ連型社会主義の構造

横浜市立大学 佐藤経明氏

C 中国社会主義の理念と現実

横浜市立大学 矢吹 晋氏

D 東欧社会主義の特殊性

法政大学 斎藤 稔氏

E 現代ヨーロッパの社会主義思想—自主管理型社会主義論の理論と現状

東洋大学 新田俊三氏

F 資本主義と社会主義

東京大学 馬場宏二氏

△参加学生 94名(内女子24名)

東大(21)、早大(10)、筑波大、津田塾大(各7)、慶大(6)、東外大、成蹊大、中大(各4)、独協大、ICU、明大(各3)、東女大、法政大、明学大、立教大(各2)、群馬大、千葉大、東工大、お茶の水女大、静岡大、都立大、青学大、学習院大、上智大、白百合女大、専修大、玉川大、東洋大、明星大(各1) 合計29校

今回のセミナーは、飯田館長の年来の希望で、大内力東大教授の全面的な企画・運営・指導により実現したものである。

最近、資本主義社会の「危機」が深まるにつれ、一方の体制である社会主義社会への注目にも新たなものがある。しかしながら、歴史の必然といわれ輝かしい未来を

もう一つの塾

東京工業大学教授
江藤 淳

●NHKラジオ第一放送
●時の話題II 昭和53年1月25日

塾というとは最近では学習塾のことか思い浮ばなくなっています。これとは全く行き方の違うもう一つの塾というものがある、というお話をしてみました。

本来の塾、例えば吉田松陰の松下村塾とか福沢諭吉の慶応義塾とかいうような、教師と学生が膝をつき合せて一つ釜の飯を食べながら勉強するという塾が、実は東京の郊外にあるのです。それは、ご存知の方もあるかと思いますが、八王子にある大学セミナー・ハウスです。これは野猿峠の多摩丘陵地帯に設けられたもので、財団法人で民間の機関であります。今からもう一三年前、昭和40年から活動を開始しています。そこで何をやるかという、各大学の先生達が自分の教えているゼミの学生を連れていって、ここで一晩なり二晩なり泊って集中的に授業をする。もう一つは、大学セミナー・ハウスの委員会が計画なさる共同セミナーで、いろいろなテーマ、例えば「鵬外と漱石」とか「人間はどこまで機械か」というようなテーマを決めまして、講師には各大学から専門の先生が出講される。学生諸君は個人的に参加する。時には二〇校、三〇校という多くの大学からの申込みがあって、東京周辺ばかりでなく、関西や北海道地方からの参加者もあるようです。

大体、日本の大学というのは、例えば英米の大学と違い、寄宿舎制度、全寮制度になっておりません。英米の大学は原則として学生は寮に住み、そして大学の教師達も大学のある町に住んでおりまして、歩いても行けるし、自転車に乗っても車でも行けるというところで生活を共にしている。大学と一つの共同体であって、ただ学問をするところだけではない。全人的な人間の触れ合いの場であると考えられています。日本でも旧制高等学校にはこういう考え方があって、現在でもその出身者の方は当時の良き時代を非常に nostalgically 思っておられるようすが、戦後、新制度になりました。国公私立あわせて大学が沢山できまして。それと同時に、かつての旧制高校の雰囲気、あるいはその元 residential college の気風が全くなくなってしまう。とかくどこでもマンモス授業、先生は学生の名前を覚えられない。学生はお互い同士、同じ学年にいても卒業するまで顔も知らず、一度も話すことができないという状態のまま通過してしまふ、ということが残念ながら毎年繰り返されているのが実情です。大学紛争が今から七、八年前にございました。その原因は多々ありましようけれども、このような現代の日本の大学における人間的接触の足りなさが、大きな一因をなしたことは否めないと思います。

約束するとうたわれていた社会主義も、スターリン批判を頂点として、中ソ論争など一連の否定的現象を露呈するに至った。この社会主義の理解に關する一枚岩的な画一性が失われ、各国社会主義の多様化が進行するにつれ、現実の社会主義諸国の実像を明らかにし、そこからより実際的な未来像を探ることは、極めて今日的な課題になっているといわなければならぬ。しかし現代社会主義の全貌に触れることは、一大学の講席だけでは得難いことである。テーマ設定の意図はここにある。

講師陣には、かつてマルクス経済学において勇名をはせた、故宇野弘蔵氏の門下生が名を連ねた。総論を受けもつ大内力氏をはじめとし、佐藤、矢吹、斎藤、新田の諸氏がそれぞれ、最後は馬場氏が今西欧を担当し、最後に馬場氏が今後の問題点など総括的な話題を提示した。したがって指導者全員が講演もし演習も受けもつというハ



最終日の全体討議——中央は大内力教授

ードなプログラムのため、実質的な討議時間を節約しなければならなかったのは、発展途上国に関するセッションをもてなかつたことと合わせて、多少悔まれるところであった。

平易な言葉で現代社会主義論の核心をついた大内先生の全体講義は、労働力商品化の廃棄こそ社会主義社会の原点でありメルクマルであるとし、将来社会にわたつて、労働者の主体性とそれにもなう自己改造の必要である所以を強調して、三日間の討議もこれを導かして、労働者の自立や参加に目途とする自主管理型社会主義論に關心が集まつたようだ。

一方二日目の夕食交歓会には、当ハウスにとつてすでに恒例となつている「成人式」が繰り広げられた。館内に宿泊している二十余名の新成人に大内先生から「自立したよき Student になつていただきたい」とはなむけの言葉が贈られた。

延一〇時間にも及ぶ連続講義と七時間のディスカッションには、さすがに教師も学生もいささか疲労がみえる様子であったが、最終送別昼食会での爆笑の一時でそれは一掃されたようだ。参加者たちは、快い現状とともに、社会建設の困難な現状と、しかしほのかに見える未来への希望とを抱いて多摩の丘を下つたことであろう。

●大学生であることを体験して
(Bセッション) 小野寺 葉子

授、学生が行う楽しく有意義な学習と、自治の精神を重んじる生活、それがなんと感動的であるかを私はセミナーに参加して知つた。連帯する喜びと自治の尊さ、一人でも静かに勉強する態度、これらをもつことこそ大学生であることであらうと思ふ。大学という狭い社会の交友範囲の中で、方向なくあがいてきた今まで二年間の大学生活がとて口惜しく思われてくる。しかしこのセミナーで、一すじの光が見えてきた実感をもつことができた。今、それに気がつくのは遅すぎるのかもしれない。閉ざされた大学で、しかも今までの学校教育に毒されたわれわれが、物事に對していかに無知であることか。

現在の大学は多数の人間をかかえながら社会に貢献することがあまりにも少ない。第一、内において外に向けても人の交流がない。意見の交流なしにどうして学問が進歩するだろうか。それで社会がよりよく生まれ変わるだろうか。学問の積み重ねと研究が社会や生活に結びついていないで、どれ程の成果を上げることができようか。ちょっとあげてもこれだけある問題の穴をうめようとしているのが大学セミナー・ハウスであり、共同セミナーであると思ふ。このハウスは、INTER な存在であり、何かを学ぼうと意欲ある者が集わなくてはハウスはからつぽである。人が集えば、自由な交流と勉学が、自律的な生活をもとに築かれる。短い期間だが、ここで学んだことは長く残るだろう。

今回のセミナーは、内容が豊富で日程が短かすぎ、やや消化不良

小屋が点々と建っている七つの宿舍村があり、その宿舍村の各々にはセミナー室があります。教師も学生も中央の本館にある食堂と一緒に食事をして、セミナー室で勉強するというわけです。この一三年間に宅地造成が進み、周辺の自然は大分変ぼうしてしまつたという感じがしますけれども、まだやはり市街地に比べれば空気の澄んだ場所であります。ここには現在年間実に五万人の利用者があるそうです。私が最初に塾と申しましたのは、このセミナー・ハウスに集うて来る人々が臨時にかつての塾のようなやり方で勉強ができるという意味です。何々大学の何々ゼミという一五人、二〇人のグループが、大学の中で普通の授業をしてる間は機械的に週一遍顔を合せて散つていくのでありましようけれども、ここに来ますと泊り込んで一つ釜の飯を食べるといふのでなければ生まれないような、一つの連帯意識が生まれます。そして教師の側から言つても、集中して授業ができるというのは、大変能率がいいもので、一週間ずつこま切れに教えていくのではどうもあがらない効果を期待することがができる。このささやかな大学セミナー・ハウスに一三年間で五〇万人という多くの人がここで勉強したというのを考えてみますと、この施設はささやかではありますけれども、実は日本の大学教育、少なくとも関東地域の大学教育の非常に重要な一部を支えているといわなければならないであらうでしょう。

飯田宗一郎さんです。飯田さんは同志社大学、東京女子大学、国際基督教大学というような大学の事務系の職務を歴任された方ですが、日本に一番欠けている教師と学生の人的な接触をなんとか取り戻そうと考えられて、茅誠司さん、大浜信泉さんというような学部の長老にご相談になり、昭和37年、当時の日本の財界の指導者の一人であつた三井銀行会長の佐藤喜一郎さんとお話になつて、幸い海外の在勤が長く、日本の大学教育の現状を憂慮しておられた佐藤さんの共鳴を得、財界の協力を得てこのようなセミナー・ハウスができたというのであります。この飯田さんという現在の館長、長いこと専務理事をしておられましたが、この方の独創的なアイデアと、それを実現させる資金がうまく結びついて、当時はまだ高度成長時代でしたけれども、大学紛争にも少しもさわがされず、貼り紙一つなく、まことに清潔な環境で、このセミナー・ハウスのモットーになつております「Plain living and high thinking」「簡素な生活と高潔な思想」というのを、各大学の若い諸君とその面倒を見ている先生方が実現しておられるというのには、まことに心強いことだと思ひます。

最近では、ここに国際セミナー館というのが建築中でありまして、留学生に日本の生活のオリエンテーションをし、日本の学生との交流をしようという企てのようであります。小さいセミナー・ハウスから大きな夢が育ちつつあるということをご紹介いたします。

であつたことは大変残念であつた。しかし、現代の社会主義というさまざまな顔をもつた思想がどのように発展し、社会を構成し、問題をかかえているかを、先生方だけでなく参加者それぞれから聞くことができ、私の社会主義理解の第一歩となつたことは確かである。今日の社会主義は、国家を支える基盤となつてから短いながらもそれなりの歴史を持ち、次々生まれ出る問題に悩み、流動し模索している。この姿に、私達は青年期にある自分を見るような思いがした。各自がそれぞれ持つ社会主義という像もかなりイメージ化されており、解決には今後の事態の分析と精密な研究の蓄積が必要である。道程はほど遠いが、参加者が大学に帰り、セミナーで学んだことを基礎としてさらに社会主義の認識を深め、また八王子に集い、一歩前進した喜びの顔で再会できたら大変幸せである。

ような気持にはみんな変わりないとかわかつた。セミナー室では先生方の熱心な講演を導火線にたちまち討論の炎が燃え広がつた。それは、一人一人が自分の蓄積をもとにしたからである。「蓄積せよ、蓄積せよ……」というが、確かに、学生時代の本源的蓄積への炎はこういう所でかき立てられるのだらうと思つた。

今回のセミナーは、僕に一つの新鮮な物差を与えてくれたと思ふ。それは、確かにすぐには役に立たないかもしれないが、自分たちの生きる社会の物差であり、深い洞察に根づいた分析であつたからである。この物差は、学生であることから離れて社会へ埋没して行く時、そして、いったい自分には何が残つているかを問うた時、貴重な羅針盤になることだらう。現代社会が僕たちを規定してゆくなら、僕たちは、現代社会をより正確に計つていかなければならない。このセミナーがそういう意味で布石になることを願つたのは、一人僕だけではないだらう。

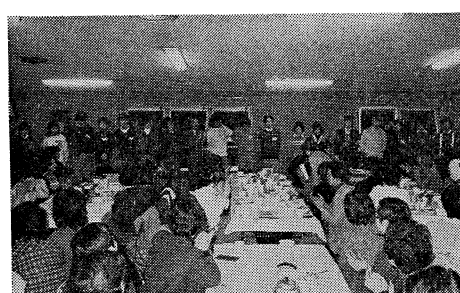
時間や日程上の制約で何もかもとはいかなかつたけれども、テーマ以上のことを、このセミナーは僕に語つてくれた。(明治大学3年)

●セミナーで得たもの
—現代社会の羅針盤—
(Aセクション) 仙石 悟

社会主義といへば、一つの体制のように思われがちだが、今回のセミナーでは単なる体制論に止まらず、広く社会人間的な理念へのアプローチも組上りのぼつた。僕はこのセミナーに参加するにあたって、ことし最終学年を迎えることもあり、やはり一つの布石として十分にセミナーを活かしたいと思つたのである。参加する学生の学部学年こそ違つても、この

夕食後のひととき、在泊者一七〇名(五グループ、三五大学)が一堂に会して、翌15日に成人を迎える二二名の若人の前途を祝し、当ハウス恒例の「成人式」を行つた。参会者一同の暖かい拍手に促されて正面に並んだ新成人に飯田館長から記念品が手渡され、共同セミナー指導の大内力東大教授からはなむけの言葉が贈られた。同教授は「自身が成人となられた当時に回想されたあと、生徒(Pupil)と学生(Student)の違いに言及、最近は大學生までが手とり足とりの指導を待つている。「学生」に求められるのは自から問題意識をもち自らの責任において解決せんとする自主性ある態度である」とし、この日を契機に Pupil から抜け出て真に Student になるよう要望された。最後に参会者全員

が起立し、有志の音頭とギターの伴奏で「友よ」を力強く合唱した。



拍手で祝福される新成人たち

●事業部だより

△12・1月の利用状況▽

12月はゼミ回数九五、宿泊延人数三、九一三人で昨年同月をしのぐ盛況を見せた。これに対して1月は、各大学の学年末試験の迫る時期となるため、後半の減少が響いて、ゼミ回数六七、宿泊延人数一、六九八人に終った。

●12月前半のキャンパスの話題二つを紹介したい。一つは6日から三泊で行われた「同・立インター・セミナー」。厳密には立教大社会学部産業関係学科・武沢信一教授と同志社大文学部社会学科・中条毅教授が指導にあたる経営・労働問題の合同セミナーである。参加者は両大学約半数ずつ、立教は一・四学年、同志社は三、四学年の学生計五五名で四つのセクション(疎外対策、経営参加、中高年問題、企業の社会的責任と労働組合運営)に分かれて討論を続けた。この東西両大学によるユニークなセミナーは、前記両教授が労務学会を通じての友人であることから実現したものである。以来、毎年東京と京都で交互に開催され、今回で八回目を迎えた。企画・運営も今では学生自身の手に移され、両ゼミは毎年4月頃から勉強を重ねて年末の合同セミナーに備えるという。当ハウスの開催は二回

目であるが、「討論の場だけでなく、自然に囲まれた落ち着いた雰囲気の中で、うちとけた交わりが出来た」(立大学生代表・大出雅明君)と好評のようだ。ともあれ、武沢・中条両教授の出会いから発展したこの「東西交流」、その友情の輪をさらに広げながら今後成果を上げて行くことであろう。なお、同志社大OBでもある飯田館長は8日午後お茶の会を設けて参加者一同を歓待した。

●もう一つのトピックは早稲田大学の見事な利用の姿である。特に12月8日から15日までの一週間をとって見ると、実に一七ゼミ、延べ五五〇人という数字になる。ワセダ・ウィークともいうべく、この丘はさながら早大キャンパスの延長の観があった。グループは八人から一〇人までさまざまであるが、その多くは一泊二日、約半数がいわゆる卒論ゼミであった。理工学部の「建築ゼミ」一〇〇名は当ハウス建築の設計者・吉阪隆正教授の紹介による利用であるが、その夜は講堂に教師・学生全員が集って交歓のひとときを過ごした。その中には当ハウスの設計を担当してきたU研究室の松崎義徳氏の姿もあった。現在、構内で建築中の二つの建物の工事現場で指揮をとっておられるが、この日ばかりは一利用者として宿泊し、早朝の丘をわが家の庭とばかりにランニングに励んでおられた。な

お、前記一七グループのゼミの指導者のうち一一名が千人会の会員である。



日本の味——民家で焼いも(館長と留学生たち)

●大学間の交流、国家間の交流、世代間の交流——12月16日から二泊三日で行われた当ハウス主催の第5回国際学生セミナーでは、この幾重もの交流が同時に展開されていたといえるだろう。「文化接触と日本」を主題に取り上げて新たにスタートしたこのセミナーについては、次号で詳しい報告があるはずであるが、これには日本人九八名、外国人(一五カ国)二七名、計一二五名が三三の大学から参加し、内外の社会人も一七名を数えた。講義、シンポジウム、討論を通しての知的交流に加え、会期中にはさまざまな人間交流の場が設けられた。国際交歓の夕べでは、国境を超えた共同の楽しい出しものが演じられたし、一方遠来

荘では飯田館長自らが長時間問いり端で芋を焼き、諸外国からの若者をもてなす光景も見られた。また、会期中の交歓ティー・パーティーや昼食会には、国際交流に関心を持つ内外のゲスト一八名がこの丘を訪れ、セミナーの指導者や参加者と交わりを深めて下さった。

●暮から正月は交流・親睦をさらに深める季節であろう。利用者の生活の中に組み入れられた恒例の諸行事がいくつか行われているので、ここにその風景を点描してみよう。まず、クリスマスの夕べが22日、今年は夕食交歓会形式で食堂で行われた。当夜の在泊は東京理科大・大沢ゼミ、成蹊大・宇野ゼミ、杉野女子大・田村ゼミ、東邦大・吉田ゼミ、国際経済商学生協(アイセック)の五グループ二一〇名——うちアイセックの



小沼チーフが腕をふるったクリスマスの七面鳥料理

日本委員会総会には全国二六大学の学生代表が参加していたので、国公私三〇大学が集うことになった。これにボランティアとして参集した共同セミナー参加の学生、そして当ハウス職員。この大家族集会に広い食堂もぎっしり満員。第一部のキャンドル・サーピスでは灯火の大きな輪の中でキャロル合唱、成蹊大・宇野重昭教授のスピッチ、ヴァイオリンの演奏などで静かな一時もった。食堂が腕をふるった立食パーティーで腹ごしらえをしての第二部はレクリエーション。それぞれ趣向をこらした各グループの出しものやゲームが会場をわかした。また、六グループ八三名が宿泊した25日(日)のクリスマス当日の夕食時にも、食堂心づくしの祝会プログラムが組まれ、各グループのテーブルには特製のケーキにロケットの灯がともされていた。なお、在泊者から寄せられたクリスマス献金一万円は、今年も重症心身障害児の施設、島田療育園に届けられた。

●次いで27日には、これも年末の定例行事となった餅つき大会が行われた。この昔ながらの年の瀬の情緒を味わうために、構内の民家・遠来荘は格好の場を提供してくれる。朝から担当の職員が、屋外ではかまどを作って火をたき、室内では畳の上に机、食器を並べるなどの準備を進める。そして昼食時、セミナー室で午前中の勉強

●館長日記から

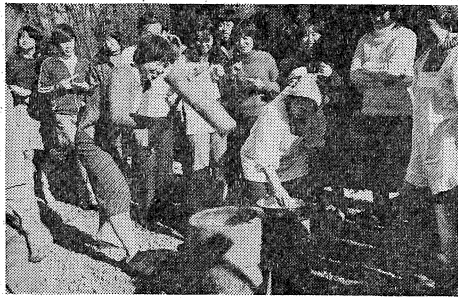
2月17日、法政大学安井ゼミが紅梅一株を最終ゼミの記念樹として植えられた。今年定年を迎えられた安井郁教授の最後のゼミである。このゼミとのつきあいは長く、通算15回になる。時には奥様も一緒にされることもあり、私も「これぞゼミナール」の感を深くした。大学教育の厚みと深さは、このような学者によって形成されるのである。

◆安井先生は人も知る原水爆禁止運動の創始者であり元原水協理事長である。国際法学者として著名である。そしてすばらしい余技を持っておられ、昨年は古稀を記念して歌集『永劫の断片』を出版された。セミナー・ハウスを詠まれた歌もいくつか入っている。人生は日暮れて道遠したが、自分の血の色をもった歌を詠んでいきたいという願いから60歳で作歌を始めたという。南原繁先生の歌集『形相』とともに、ゆかりの深い歌集として愛蔵している。◆2月は斎藤勇著作集別巻『なつかしき人々』を楽しく読んだ。古今東西の原籍を読まれたこの老学者が交遊された人々についての人物論であり、回想記である。登場する人物は第一級の仕事を成しとげられた師であり友である。なつかしき人々を追慕する著者のまなざしはあたたかい。そして最も幸せなことは、著者斎藤勇先生は、私にとってなつかしき人々のお一人である。

る。そしていま健在にして91歳。

◆人間とか、教育とか、生活とか、学問とかいうものを考えるとき、含蓄に富む書物が手許にあると心強い。またとない人生の指南書となるからである。昭和25年4月20日と署名してあるカーライルの『衣服哲学』は上代たの先生からいただいた貴重な指南書である。私の座右にあつて、時に活力を与え、氣力を回復させ、また身辺に春氣をただよわせ、寒氣を感じさせるのである。衣服哲学は新渡戸稲造博士の講演によるもの、そして上代先生は同博士の愛弟子の一人。この目白の大先輩はいまも半ば健在にして92歳。◆昭和24年3月29日、私は京都に別れを告げた。その日京都駅まで見送りに来て下さった同志社大学教授田畑忍博士から、餞別と云って岩波文庫『西郷南洲遺訓』をいただいた。この遺訓正に含蓄の達識。觀察の絶妙。「性は同じうして而て質は異なる。質異なるは教の由つて設けらるゝ所なり」とは遺訓の一節。近頃己れをうしなうことなきより、この書をひもとくことがある。◆3月20日、クラブ関東で故正田建次郎先生の一周年の追悼会がある。痛恨いふべき言葉もなく、かげがえのない立派な理事長であった。75歳のとき、梅の花を観て急逝された。会場は気品ありて静か、正田先生の人間性がおうていた。近來稀れなあなたたかい集いであった。

を終えた各グループが参集する。毎年この季節に長期の教育原理ゼミを行う杉野女子大ほか七グループの一一八名。前庭に据えた二つの臼を囲むと、職員と在泊者が交互に杵をとって、餅つきの音が快く響く。つき上った餅はサービスタワーのおばさん達の慣れた手で、次々と一口大にちぎられて、きな粉やあんなどにまぶされる。今年も好天に恵まれたが、民家の内と外とに展開されるこの交歓模様はまさに田園風景というべく格別になごやかでよい。年越そばとのり合わせがまた好評であった。東大の比較文学・比較文化専攻の大学院生と一泊された江藤淳教授は、早速「週刊現代」(二月九日号)で『大学セミナー・ハウスのこと』と題し、「たつぷり勉強して翌日のお昼の時間になると、暮だというので、あの移築した民家の



歳末のもちつき(杉野女子大の学生たち)

庭でおそばと、つきたてのもちとのご馳走にあずかりました。みんな大喜びしたことはいうまでもありません。そういう八王子らしい土の匂いのするもてなしにあずかるのも楽しいことです」と、この日の餅つき風景を記述された。
●年明けて1月7日(土)の夕食時には、新春早々の週末をセミナーの丘で合宿しようという一二グループ一三八名を迎えて、新年第一回の交歓会を開催した。岡義達東大教授のスピーチ、各グループの合唱、そして寺沢恒信東京都立大教授の飛入り能狂言が正月にふさわしい雰囲気をつくり出した。そして次週14日の夕食時の食堂では一日早く「成人の日」交歓会が行われた。(9頁に別掲)

●利用状況

* 11月2日利用
* 11月3日利用

立教大学教授	大橋 泰二
芝浦工業大学教授	十代田 知三
早稲田大学教授	岡田 純一
東京学芸大学教授	大久保 典夫
早稲田大学助教授	西宮 輝明
早稲田大学助教授	片山 寛
早稲田大学助教授	池原 義郎
早稲田大学助教授	香原 志勢
早稲田大学講師	平松 二朗
早稲田大学講師	鈴木 紘
日本大学教授	向坂 寛
早稲田大学教授	染谷恭次郎
東京都立大学教授	伊藤 文人
東京都立大学教授	三好 洋子
津田塾大学教授	百瀬 宏
明治大学教授	長谷川昭彦
明治学院大学教授	増田 茂樹
早稲田大学助教授	成田誠之助
東京都立大学教授	金沢 孝文
東京都立大学教授	坪井 實
早稲田大学助教授	大頭 仁
早稲田大学助教授	矢作吉之助
早稲田大学助教授	十代田 三知男
早稲田大学助教授	牧野 力
早稲田大学助教授	小林 英夫
早稲田大学助教授	田村 康明
東京都立大学教授	高田 清朗
早稲田大学助教授	勝村 茂
早稲田大学助教授	鳴 武彦
立教大学助教授	三戸 公
早稲田大学助教授	肥前 栄一
東京都立大学教授	田村 恭
早稲田大学助教授	馬場 英夫
国際基督教大学児童文化研究会	清水 英三
青山学院大学教授	天利 長三
立教大学助教授	鈴木 正男
電気通信大学教授	大須賀政夫
東京都立大学教授	下山 瑛二
東京都立大学教授	江藤 价泰
明治学院大学教授	神保 信一
東京薬科大学教授	志田 信男
早稲田大学教授	村松林太郎

以文社

青山学院大学助教	岡田 昌志	第5回国際学生セミナー	東京都立大学教授	寺沢 恒信	東京経済大学事務研究会	日本水産**	福田 邦雄
東京理科大学教授	国分 康孝	同・立イニター・セミナー	慶応義塾大学講師	鎌滝 哲也	東京農工大学教授	サンキョ自動車	丸内 優
東京都立大学助教	堀川 浩甫	大学沙鷗連盟	明治学院大文化団体連合会執行部	早稲田大学教授	早稲田大学教授	福井放送ディレクター	
早稲田大学教授	尾関 守	国際経済商学学生協会日本委員会	明治学院大学サークル連合会	東京都立大学教授	東京都立大学教授	川副 博司	
東京農科大学講師	岩崎代志治	日本精神科看護技術協会	東京大学	明治学院大学サークル連合会	高木健次郎	藤井 賢二	
東京理科大学教授	大沢綱一郎	カルヴン研究所	早稲田大学講師	金子 敬生	独協学院大学		
成蹊大学教授	宇野 重昭	兵庫県建築部管轄課	東京都立大学教授	速水佑次郎	和光大学助教	横山 浩司	
明治学院大学助教	橋本 敏雄	文学教育研究者集団	武蔵工業大学助教	桑原 哲郎	第96回大学共同セミナー		
慶応義塾大学教授	佐藤 豪	新英語教育研究会	東京都立大学助教	稲垣 寛	第97回大学共同セミナー		
東京工業大学助教	榎本 肇	海洋科学研究会	立教大学助教	所 一彦	国連セミナー・ユニオン		
上智大学講師	宇野 重昭	日本OR学会	東京都立大学講師	竹下 謙	生理心理学研究会		
明治大学教授	三上富三郎	日本水産	聖心女子大学講師	星野 命	異常行動研究会		
中央大学教授	近藤 圭一	新東京日産自動車販売	一橋大学教授	竹内 啓一	非暴力トレーニング・セミナー		
法政大学教授	江頭 淳夫	【個人利用】	横浜国立大学講師	青柳 肇	東京神学大学教職セミナー		
東海大学講師	鈴木 徹三	明治大学大学院生	中央大学助教	石崎 忠司	外国人留学生問題研究会		
杉野女子大学教授	高橋 進	外崎 淳一	東京都立大学教授	諸井勝之助	滝野川教会学校		
中央大学教授	田村 皖司	神奈川大学社会福祉研究会	東京薬科大学助教	古屋野正伍	八王子モラロジー青年部		
学智院大学助手	水野 朝夫	東洋大学教授	東京薬科大学薬学研究会	長谷川浩一	国際ロータリー第28地区青年りー		
中央大学講師	守矢 一男	慶応義塾大学助教	青山学院大学助教	江頭 淳夫	ダー・セミナー運営委員会		
東京大学教授	木下 徳明	早稲田大学講師	東京家政学院大講師	小島 俊明	伊勢丹八王子店		
大月短期大学講師	村越 洋子	慶応義塾大学教授	中央大学教授	坪塚作太郎	日本水産**		
日本獣医畜産大教授	吉田 六順	東海大学講師	東京薬科大学教授	亀山 三郎	日本電氣		
立川短期大学教授	吉田 幸弘	東京大学東京天文台	中央大学講師	木下 徳明	日本電氣コストコンサルティング		
多摩美術大学卓球部	吉田 光孝	上智大学教授	中央大学教授	太田俊太郎	東邦大学教授		
東邦大学教授	光孝	神奈川大学教授	慶応義塾大学教授	大橋 幸	東洋大学助教*		
第95回大学共同セミナー		石川 経夫	東京学芸大学教授				

編集後記

交友館と国際セミナー館の落成を控えて、キャンパスは春とともになにかにせわしくなってきました。本号では二つの建物の性格をご紹介します、皆さまの関心を仰ぐことにしました。

12月の第5回国際学生セミナーと1月の第97回大学共同セミナーは、編集の都合で次号に掲載いたします。前者は事業部により一部触れましたが、法人主催の昭和52年度教育プログラムはすべて無事終了したことを、とりあえずご報告しておきます。

千人会に紙面を多くとりましたけれど、二回分のご報告と会員の皆さまの近況やおたよりをお伝えすることができました。(能)

金子武蔵著

西洋精神史考

A5判 2500円

無限と有限、作用と実体、主体と客体等々の矛盾対立とその克服という論理的視点から明快に分析した力篇

バーネット 西川 亮訳

A5判 4800円

初期ギリシア哲学

断片の訳出とその解釈によって各哲学者の思想を文献学的に論究した前ソクラテス期哲学研究の名著の完訳

浜井 修著

社会哲学の方法と精神

A5判 2800円

マックス・ウェーバー、フロイト、マンハイム、ポパーなどの方法と精神をめぐる注目すべき批判的理性論集

ヘーゲル 寺沢恒信訳

A5判 4800円

大論理学 1

「大論理学」第一巻第一書、初版本の完訳。鎌骨の訳文。訳注・第二版との相違を扱う付論から成る。本邦初訳

柏原啓一著

ホモ・クワエレンス 論集1

A5判 2000円

ホモ・クワエレンスとは「問う人」の意である。実存と歴史とを問いつつ生み出された著者自身の哲学の軌跡

P.リクール 久重忠夫訳

四六判 1300円

人間 この過ちやすきもの

カント、デカルト等の著作を手掛りに、人間構造の内部に潜む道徳的悪の可能性を追求した解釈学的人間学